

神戸港は古代から国際港だった！

日本を代表する国際港・神戸と横浜。商都大阪に近い神戸と首都東京に近い横浜、この二つの港が江戸の幕末に開港された経緯はよく似ているし、その後の街の発展の経緯もどこか似たところがある。両者に共通するイメージは「異国情緒あふれるエキゾチックでハイカラな街」であろう。そして、なにかにつけ、この二つの港町は様々な比較の対象となる。人口や予算規模では圧倒的に横浜が優位に立ち、港湾関係も阪神淡路大震災以後は横浜が圧倒している。ただ港に関して、神戸が横浜に誇れる点がある。それは、神戸は幕末開港以前にも国際港としての歴史を持っているが、横浜にはそれがないということだ。

そもそも、江戸の幕末、日米修好通商条約のなかで、開港地として神奈川、兵庫を含む四港の名前が挙がっていた。つまり、もともとは「横浜」「神戸」ではなく東海道の宿場である「神奈川」、国内重要港湾である「兵庫」の二つを開港することになっていたのだ。しかしこの二つの場所についてはここを開港すれば日本人と外国人との衝突も懸念されると言うことで、結局、神奈川はその横にある村の「横浜」を、兵庫は隣の閑村「神戸」を開港地として、世界に港が開かれていったのである。

こうして、同じような経過をたどって開港し、近代的な都市に発展していった神戸と横浜だが、前述の通り、神戸の方は幕末に開港される以前から国際港としての歴史を有していたのだ。神戸の港が歴史の上で登場するのは奈良時代の頃で、そのころは神戸市灘区の「敏馬（みぬめ）の浦」が港として機能を持っていた。万葉集にも歌われたこの港には遣唐使船などが泊まったという。奈良時代の後半には、摂播五泊ノ制にともないもう少し西の「大輪田泊」が港として登場し、敏馬からこちらへ港の機能が移された。

この大輪田泊に目を付け、対中国貿易の拠点として本格的な国際港としての地位を築き上げたのが平清盛である。彼は、平家の荘園 福原荘の南にあるこの港に早くから関心を寄せ、平氏政権を樹立させると承安年間(1171~1174)に大輪田泊を修築し、日宋貿易の拠点とするのであった。続く鎌倉幕府も大輪田泊を拠点に日宋貿易を進めるが、元寇で中国との関係が一時途絶えてしまう。室町幕府になると三代将軍足利義満が中国との間で日明貿易を開始し、兵庫津（室町以降の大輪田泊の名称）が再び対中国貿易の拠点として利用されるようになる。

その後、応仁の乱で兵庫津は焼失して、外国船の入港は途絶えてしまう。結局、江戸幕府は鎖国政策をとったため、兵庫津は国際港として地位を長崎に譲るものの、国内の重要な港として発展することになった。

このように、神戸港は幕末の開港以前から、その前身・兵庫津(大輪田泊)が対中国貿易の拠点として利用されてきており、古代から国際港だったことが伺えよう。